

多職種合同カンファレンスの質の評価と効果に関する研究

～果たして多職種カンファレンスは意味があるのか～

中里和弘¹⁾ 2) ・ 友松郁子¹⁾ ・ 片山史絵¹⁾ ・ 山崎浩二¹⁾ ・ 山口朱見¹⁾ ・ 川越正平¹⁾

1) あおぞら診療所 2) 東京都健康長寿医療センター研究所

背景

＊在宅医療連携拠点事業受託事業者（拠点）数

平成23年度：10ヶ所【国/厚労省が主体】
平成24年度：105ヶ所
平成25年度：国⇒各都道府県が管轄して実施

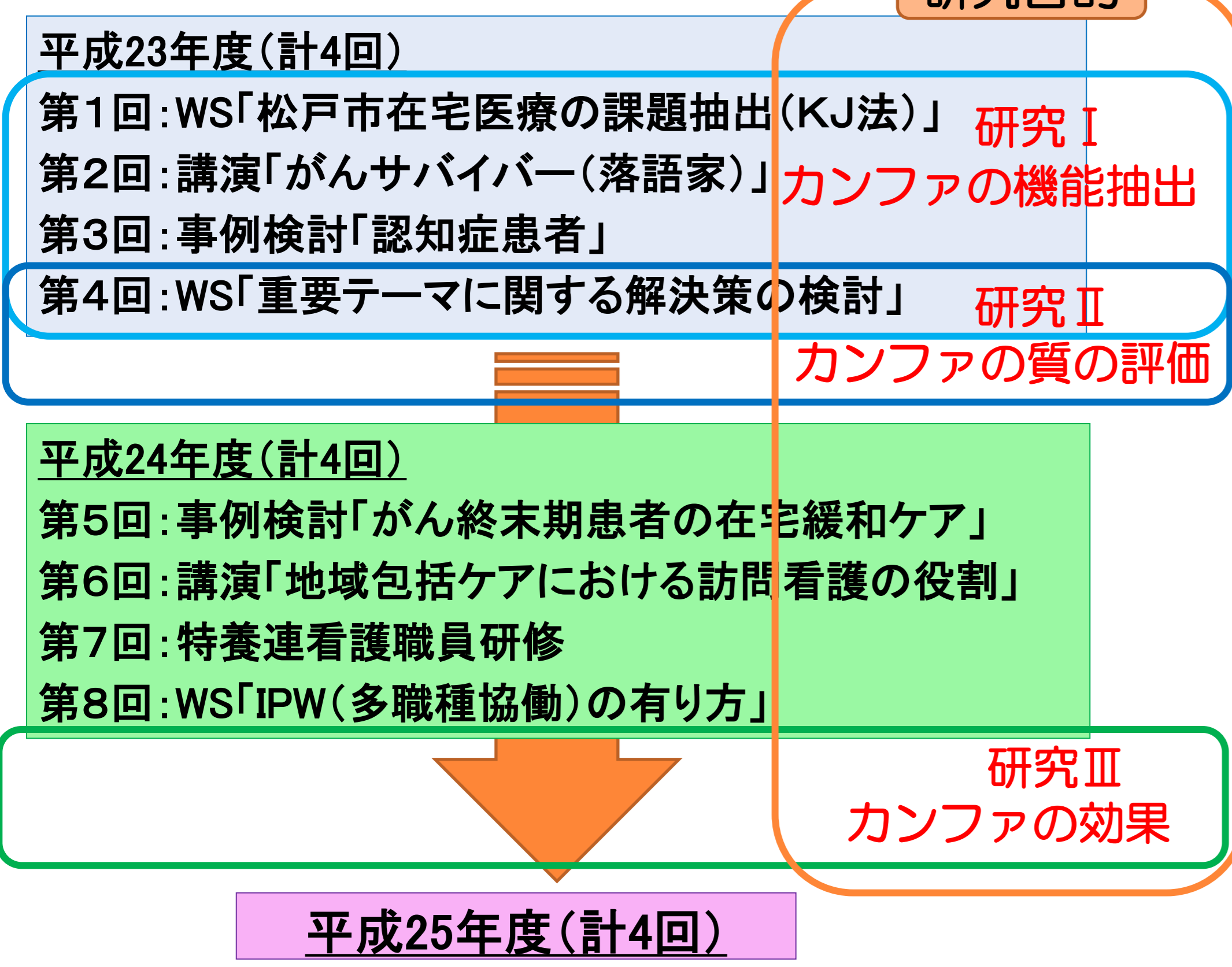
必須事業

多職種が会する場の開催
(多職種合同カンファレンス)

＊地域を“1つの単位”として捉え、地域の多職種が所属の枠を超えた仲間、“チーム”として臨床に携わる必要がある

＊地域の中の医療福祉従事者が連携を取るには、顔の見える関係づくりが重要である

カンファレンスと研究構成



研究I.カンファの機能抽出

方法

第1～4回の参加者に各回で終了後にアンケートを実施、カンファの感想(自由記述)の部分を分析対象とした

職種	第1回	第2回	第3回	第4回
医師	23	7	17	14
歯科医師・歯科衛生士	10	10	14	11
看護師(病院・診療所/ST)	40	15	31	23
薬剤師	23	19	18	16
PT・OT	5	6	6	8
ソーシャルワーカー	21	14	10	13
ケアマネジャー	38	23	23	16
在介・包括職員/市役所職員	4	12	13	1
在宅施設職員	—	8	3	1
合計	164	114	135	103

結果

全参加者516名中、回答の得られた計394人の記述を分類、16カテゴリーを抽出

カテゴリー	記述数				
	第1回	第2回	第3回	第4回	
1 多職種との意見交換・グループディスカッションの肯定的評価	25	28	30	30	
2 カンファレンス全体に対する肯定的評価	24	13	3	5	
3 時間に関する要望	19	6	3	5	
4 多職種との交流・情報共有	15	0	0	6	
5 大人数の参加者に対する驚きと希望	11	0	0	1	
7 顔の見える関係づくり	9	3	4	3	
8 多職種連携の重要性の認識	8	11	2	1	
9 運営についての肯定的評価	7	0	11	3	
10 自己の気づき	7	4	12	9	
11 参加者のグループ分けに対する肯定的評価	6	1	0	0	
12 他職種の考え方の認識	4	4	23	4	
13 継続開催の希望	—	7	2	0	
14 症例について	—	—	6	0	
15 解決策を話し合えたことの肯定的評価	—	—	—	5	
16 課題の解決策の提案	4	—	—	5	
その他	4	0	4	4	
	144	77	100	73	394

カンファレンス機能
・多(他)職種との交流
・他職種の専門性を知る
・自分の職種の役割の再認識
・顔の見える関係づくり
・地域の現状を知る
・多(他)職種との意見交換
・職種を超えた共通性を知る
・情報共有
・多職種連携の重要性を知る
・知識や学習

運営側要因
・グループが多職種で構成されている
・内容や進め方の工夫
・参加者主体型の内容である

参加者感情要因
・参加して楽しい
・多職種連携に興味のある人が多くいることに、勇気づけられる(前向きな気持ちになれる)

研究II.カンファの質の評価

方法

第4回のカンファの参加者110名にアンケートを実施
⇒回答数98名(回収率:89.1%)

調査内容

研究1で抽出された16カテゴリーを基に参加者の立場からカンファの質を量的に評価する項目を作成

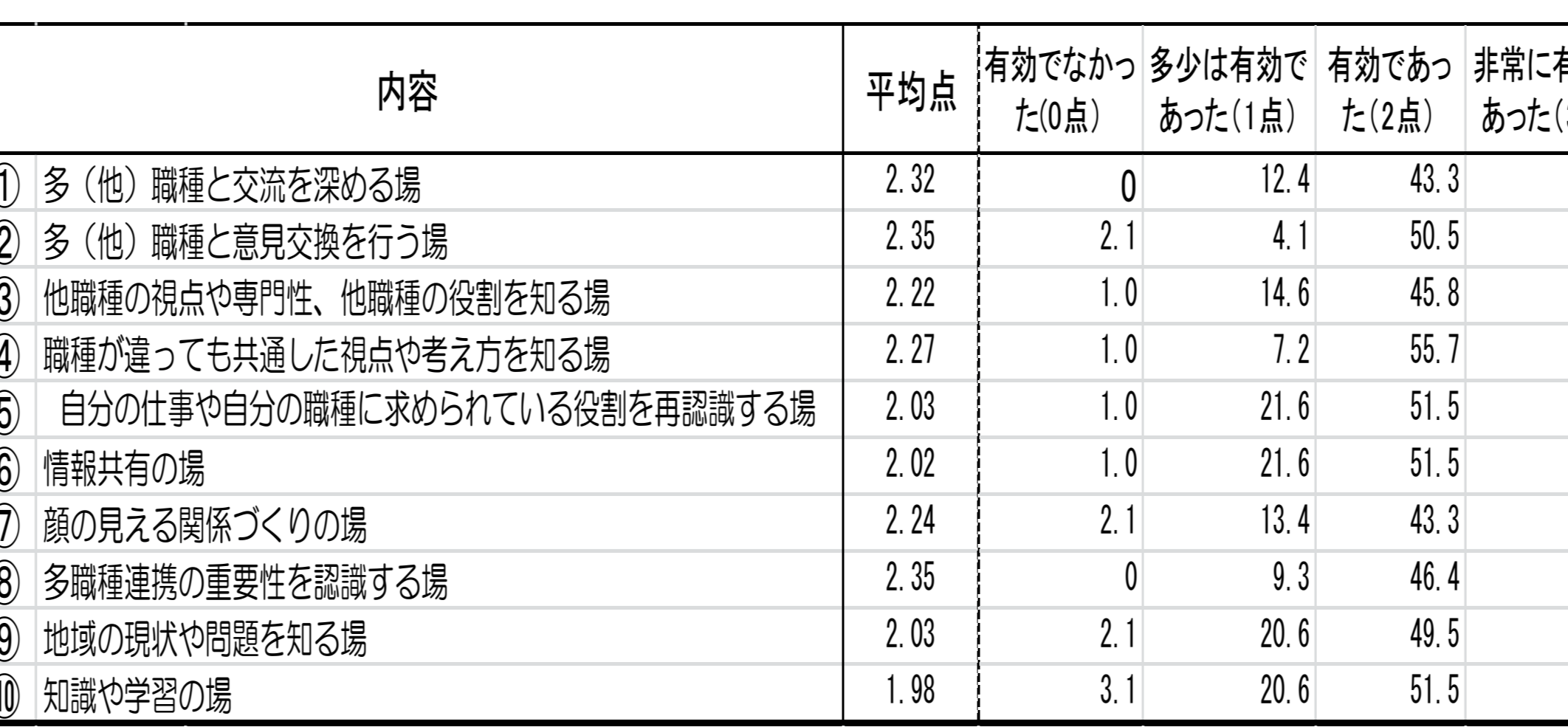
- ①カンファ機能(10項目)
- ②運営側要因(3項目)
- ③参加者感情要因(3項目)

結果

①カンファ機能

過去4回で参加したカンファ全体として、以下の内容に関して、「1.有効でなかった(0点)」～「4.非常に有効であった(3点)」を評価

内容	平均点	有効でなかった(0点)	多少は有効であった(1点)	有効であった(2点)	非常に有効であった(3点)
① 多(他)職種と交流を深める場	2.32	0	12.4	43.3	44.3
② 多(他)職種と意見交換を行う場	2.35	2.1	4.1	50.5	43.3
③ 他職種の視点や専門性、他職種の役割を知る場	2.22	1.0	14.6	45.8	38.5
④ 職種が違っても共通した視点や考え方をを知る場	2.27	1.0	7.2	55.7	36.1
⑤ 自分の仕事や自分の職種に求められている役割を再認識する場	2.03	1.0	21.6	51.5	25.8
⑥ 情報共有の場	2.02	1.0	21.6	51.5	25.8
⑦ 顔の見える関係づくりの場	2.24	2.1	13.4	43.3	41.2
⑧ 多職種連携の重要性を認識する場	2.35	0	9.3	46.4	44.3
⑨ 地域の現状や問題を知る場	2.03	2.1	20.6	49.5	27.8
⑩ 知識や学習の場	1.98	3.1	20.6	51.5	24.7

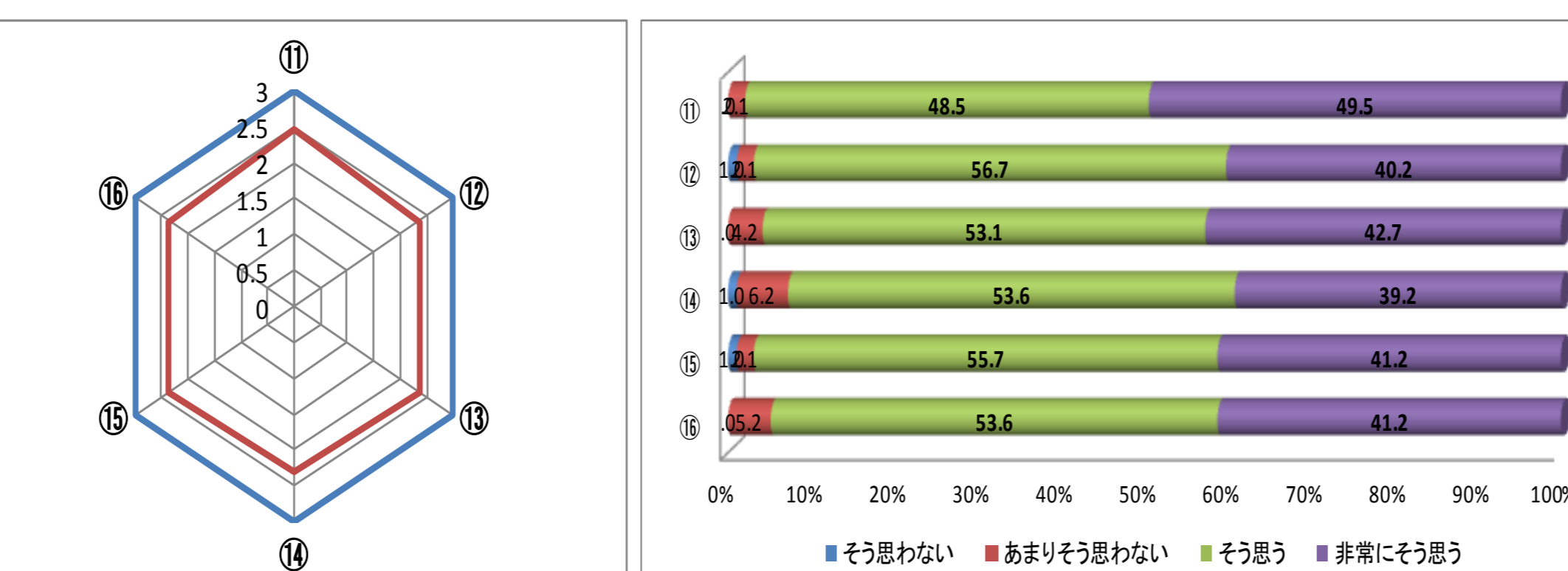


得点を数値化、項目の回等をレーダ化することで、カンファの質の担保、内容の振り返り(企画者の開催意図と参加者の評価のスレ)の資料となる

②運営側要因/③参加者感情要因

「1. そう思わない(0点)」～「4.非常にそう思う(3点)」

内容	平均点	そう思わない(0点)	あまりそう思わない(1点)	そう思う(2点)	非常にそう思う(3点)
⑪ 各グループが多職種のメンバーで構成されていた	2.47	0	2.1	48.5	49.5
⑫ カンファレンスは主催者側から参加者側への一方的なものではなく、参加者主体型の内容であった	2.36	1.0	2.1	56.7	40.2
⑬ 主催者側は、各回の内容や進め方を工夫していた	2.39	0	4.2	53.1	42.7
⑭ カンファレンスに参加できて楽しかった	2.31	1.0	6.2	53.6	39.2
⑮ カンファレンスに飽きずに参加することができた	2.37	1.0	2.1	55.7	41.2
⑯ 多職種連携に興味のある参加者が多くいることに、勇気づけられた(前向きな気持ちになった)	2.36	0	5.2	53.6	41.2



全カンファレンスの総合的満足度×関連要因

参加した全カンファの総合的な満足度

参加者平均点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点	10点
7.94±1.65	0	1.1	1.1	2.3	4.5	4.5	13.6	39.8	13.6	19.3

＊階層的重回帰分析(従属変数:総合的満足度)

	β	
	Model 1	Model 2
参加回数	.071	.050
カンファの機能	.357 **	.400 **
運営側要因	.296 **	.288 **
参加者感情要因	.216 †	.196 †
年齢	—	-.025
経験	—	-.033
R ²	.795 **	.818 **
R ²	.632	.670

参加者の満足度を高いカンファを企画する際には、カンファの機能(内容)・運営側・参加者の感情を総合的に考慮する重要性

研究III.カンファの効果

方法

平成25年3月(第8回カンファ終了後)、カンファに過去1回以上参加した313名に質問紙調査(郵送法)を実施
⇒回答数180名(回収率:57.5%)

調査内容

- ・過去のカンファの評価(研究2の項目)
- ・カンファの参加の効果

結果1

1)「参加が日常の仕事やケアに役立っているか」
⇒「はい」が82%、「いいえ」が18%(無回答除外)

結果2「実際にどのように役立っているか」

1)で「はい」と回答した者を対象
・・・127名から回答
⇒3つの上位カテゴリー(①自己領域、②連携領域、③患者・家族領域)から計22の下位カテゴリーを抽出

上位カテゴリー	中位カテゴリー	下位カテゴリー	人数	
自己領域(55)	自己の専門性の気づき・知識の増加(32)	自己の仕事や役割、連携に対する前向きな気持ち	12	
		自己(自施設)の役割の再認識 同職種での集まり・学習の場の開催	2	
	自施設での教育(4)	自施設・スタッフへの学びの共有・活性化	4	
		知識・視野の広がり(12)	知識の増加 視野が広がった 地域の情報	6 4 2
	他職種の専門性の理解・専門性を意識した対応(23)	他職種の専門性の理解(17)	他職種の専門性(仕事内容・役割・視点)の理解 困った時にどこに繋がるかわからなかった 多職種連携の必要性の認識	12 3 3
		他職種の専門性を意識した対応(6)	他職種の専門性や希望を認識した対応・連携改善	6
連携領域(56)	新たな連携構築・連携の質の改善(46)	連携しやすくなった	7	
		相談・報告がしやすくなった 電話・対面での会話がスムーズになった	10 7	
	新たな連携構築(22)	新たな連携構築・強化 ケースに関するアドバイス・意見をもらった	16 6	
		顔の見える関係(10)	顔の見える関係の形成 垣根が低くなった	7 3
	患者・家族領域(16)	退院調整(8)	患者・家族への退院指導の説明・情報に役立つ スムーズな退院調整	3 5
		患者・家族への説明/生活改善(8)	患者・家族への説明に役立った ケア対応の改善 療養者の生活・症状改善	3 2 3

総合考察

研究1(機能抽出)

「交流や意見交換」だけでなく、「自他の専門性の認識」「多職種連携の重要性を知る場」等、多面的な機能を果たす

研究2(評価項目の作成)

- ・参加者の視点からカンファの質の評価
⇒企画者の振り返りの資料
- ・尺度としての統計的な担保を確認
(3因子構造/確認的因子分析・信頼性・妥当性を確保)

研究3(日常業務への効果の整理)

参加者への自己領域・連携領域における一定の効果を確認

結論

- ・参加者の視点ではあるものの、カンファは一定の役割と効果がある
- ・カンファの質の担保、地域を超えた他機関との比較、情報共有と質向上への協働に繋がる

限界/展望

- ＊参加者の主観的評価/アンケート返事者からの回等をベースに検討
- ＊費用対効果の課題
- ＊カンファの効果に関するアウトカムの更なる検討